

『夜の寝覚』論

—姉妹をめぐる情報と語り—

The "Yorunonezame" theory
—Information and how to tell a story about sisters—

小川 あかり
Akari Ogawa

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 修士課程

キーワード：平安後期文学, 『夜の寝覚』, 姉妹

Key words : Heian period tale, "Yorunonezame", Sisters

1. 研究目的

本研究は、『夜の寝覚』(以下『寝覚』)の巻一・二における大君・中の君姉妹について、姉妹がどのように語られているか、また姉妹を中心として見た時にどのように人間関係が描かれているのか明らかにすることを目的とした。

平安後期物語『夜の寝覚』は、五巻あるいは三巻の伝本が現存するが、中間と末尾に大きな欠巻部を持つ物語である。作者は未詳であるが、先行研究では菅原孝標女説が有力視されており、『更級日記』や『浜松中納言物語』との類似点の指摘もなされてきた。本物語は中の君(寝覚の上)を主人公に据え、悩みの絶えない女の人生を緻密な心理描写で描いた点で、物語史上画期的な作品であるとされている。

先行研究は女主人公中の君の人物造型に関して論じるものが多数を占めており、『竹取物語』のかぐや姫や『源氏物語』に登場する宇治の大君・中の君姉妹の物語の影響等、先行する他の物語との関連についても指摘が多い。その反面、中の君以外や語りの方法に重点を置いた研究はいまだ少なく、研究の余地が残されているのが現状である。

そこで、本研究においてはこれまで『寝覚』研究であまり触れられていなかった人物についても取り上げつつ、主人公中の君の描かれ方を再検討した。

『寝覚』の前半部では、中の君と男君の関係に端を発して物語が展開していき、男君や対の君の奔走に分量が割かれているが、本論文では姉妹を軸において論を進めた。これは、この物語のはじめに提示されている主題、中の君という一人の女性の苦悩に満ちた人生というものを念頭に置くの

であれば、前半部における中の君の苦しみというのは大君との関係に帰結するからである。姉妹の関係性を軸におき、この物語の展開と語りの方を考察した。

2. 研究実施内容

本研究では、『源氏物語』をはじめとする先行する物語の引用や影響は念頭に置きつつも、『寝覚』が独自に作り上げた物語の様相と方法に焦点を当てて検討を行った。

中の君賛美の傾向がある語りや、場面主義的な物語の描かれ方も『寝覚』の特徴である。そのことも踏まえつつ、『寝覚』がいかんにして姉妹の対立的構図を作り上げたのかを考察し、登場人物達による人間関係の構築や情報共有の方法について明らかにした。また、大君に関しては形容表現にも注目し、姉妹の対比構造や大君という人物が持つ役割について考察を行った。

本論文の第一章では、『寝覚』前半部において行われる秘密の共有行為が、精神的に追い詰められた登場人物達の自己防衛的な行動によって成立していることについて論じた。問題解決を第一目的としない情報共有が、問題解決能力を持つ人物を共有者の枠から弾き出し、この物語を悲劇的なまま「閉じた物語」として展開させていることについて考察した。

第二章では、姉妹の対立関係増長の原因が彼女達を取り巻く周囲の振舞いにあることを述べた。姉妹に関してはもともと中の君は大君を慕っており、その情の深さは、前半部における中の君の心内語が基本的に大君に向けられていることから

うかがい知ることができる。一方で大君は中の君の「母代」意識を持っており、姉妹がそれぞれお互いに好意を抱いていたことも読み取れる。この対立関係増長の原因となっているのは、大君や中の君本人ではなく、むしろ彼女達を取り巻く周囲の振る舞いであった。父による姉妹比較の視線、中の君への鼻胤、それぞれの陣営の女房達の振る舞い、対の君を敵視する弁の乳母、中の君を悪しざまに罵る左衛門督等々、姉妹の対立的な構図は外的要因によって盛り立てられている。『寢覚』が中の君を物語の軸としながら、大君を単なる対立者にはしていないことを明らかにした。

第三章では、姉妹に対する形容表現の用いられ方から、中の君が大君と対比されることで相対的に評価されていくことを検証した。物語は中の君を至高の女性として描くために、「限りなき人」である大君を踏み台にすることで、相対的に中の君に理想性を高めていく。『寢覚』は対立する「姉妹の物語」ではなく、中の君の物語であり、大君はその女主人公たる中の君を賛美し輝かせる土台となっている女性である。しかし、大君なくして中の君は「最優」の女性にはならず、大君がいるからこそ中の君の理想性が際立っていた。

『寢覚』は、中の君という一人の女性の苦悩に満ちた人生を描き出そうとする際、その苦悩の原因を中の君自身に負わせるのではなく、周囲に負わせている。前半部において追い詰められた中の君の心が向かう先は、姉である大君であった。中の君自身が抱える苦しみの中の最たる要因は、姉への裏切り行為に対する罪悪感である。そして、大君側もまた妹と夫の裏切り行為に心を痛めつつ、それでも自らの口から中の君を貶す言葉は発さない。

また、周囲の人物達は姉妹の仲を取り持つ行動をとらず、中の君陣営では大君陣営に全てを隠して中の君だけを持ち上げ、大君陣営では気に食わない相手陣営を陥れる行動に終始している。前半部においては、中の君が抱える問題も、彼女のもとを離れて周辺人物の考えにより解決能力を持たない若い人物達に広げられていき、姉妹の気持ちと登場人物達の行動が乖離した状態で物語が展開していき、そのため『寢覚』は悲劇的なまま前半部を終えることになっている。

背を向け合ってしまった互いの陣営の中で、姉妹は幼少期に作り上げた絆を完全には断ち切らずにいる。だからこそ、両者の苦しみは大きく、親密な関係性からの落差で傷ついていくことになる。

この落差を作り上げるため、大君の人物像はただ中の君をいじめる姉という機械的なものではなく、むしろかなり人間的なものとなっている。たしかに大君の物語展開における役割としては、中の君の優美と苦悩を惹き立てる舞台装置と言える。

しかし、大君は少ない描写の中からも、一人の女性としての苦悩がしっかりと読み取れる人物である。中の君と比較され姉として劣等感を持つ大君、「母代」という自認を持っている大君、夫を寝取られた妻として苦しむ大君。大君自身もまた苦悩に満ちた人生を送っており、人間としての多面性を持ち合わせていた。

3. まとめと今後の課題

物語前半部で描かれる中の君と大君の苦しみは、契機としては中納言の行動を要因としつつも、深刻化の過程においては互いの存在が増幅を加速させていた。『寢覚』の物語基盤となる巻一・巻二で大君が果たした役割は大きい。そのため、巻二以降の中間部散逸によりその後の姉妹関係について、改作本や『無名草子』等で間接的に確認することしかできない現状は非常に惜しい。

『無名草子』によれば、大君と中の君は中間欠巻部において一応の和解を果たすようだが、それが具体的にどのような過程・方法で行われたのかは不明となっている。中の君の成長に大君の存在がどれほどの影響を与えているのかは定かではない。少なくとも、後半部の中の君はもう大君と過ごした過去の思い出に縋り付いて嘆くような女性ではなくなっている。現存している後半部において、中の君が大君について語る場面は確認できない。彼女の中で、大君の存在はかつて乗り越えたものとなっているのだろう。大君は、悪役ではなく中の君に試練と成長を与えた人物である。

今後の課題としては、『寢覚』の語りの方についてさらに考察を深めるとともに、物語文学史における本作の位置付けや姉妹に関する網羅的な研究を進めていく必要がある。『寢覚』研究には、作品の欠巻という物理的な障壁が存在するが、欠巻部が今後発見されることを期待しつつ、現存する部分の捉え直しを行っていきたい。

付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所の研究助成(DB2308)『夜の寢覚』論—姉妹をめぐる情報と語り—を受けたものです。